

は一抹の寂しさを感じた。博多港に上陸、米軍の指示通り埼玉県豊岡にある学校に入り校長に帰校報告、米一升毛布一枚乗車証、これが復員業務のしめくりであった。

九月十七日姉の病死に遭い、母も無念にも昇天、母の葬儀を終わつたのち弟妹を伯母に託し、昭和二十年九月二十一日満二十歳を迎えた薫一氏は志を立てて郷里を離れることを決心したのである。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 平和よ永遠に

山口県 檜垣 正人

はじめに

私は昭和四年四月六日、朝鮮慶尚南道釜山府土城町老丁目拾番地ノ式において、父中道熊三・母マツの二男として出生。終戦により内地に引き揚げるま

での十六年七カ月間を生地で過ごしてきた。その私もついに本年四月をもつて高齢者の仲間入りを果たす年になった。

### 父の決断

父は、岸・佐藤の兄弟宰相を輩出した山口県熊毛郡田布施町の一隅で、明治三十一年小作農家の長男としてこの世に生を受けた。

「貧乏人の子沢山」なるが故に、筆舌に尽くし難い数々の労苦を重ねながらもたくましい防長つ子として成長。農繁期ともなればその手伝いで小学校も欠席がち、早朝からの薪拾いに続く町中での野菜売りなど、夕餉の一家団樂の折に往時を偲びながら、父は少年期の生さざまを私たちによく話してくれたものであった。十八歳にして早くも両親を失つた父は、釜山で商売を営む叔父を頼って単身渡鮮。そこで商売の手ほどきを受けながら、独り立ちの日を夢見て懸命に叔父の手助けをしていた。

徴兵検査で日本男子の本懐である、「甲種合格」の栄に浴した父は、勇躍、山口歩兵四十二連隊に入隊。

後に龍山（京城）歩兵七十八連隊第十二中隊に転属したが、善行証書受賞の好成績を修めるなど、無事に兵役義務を果たし上等兵で除隊。再び叔父のもとで商売に従事、のれん分けの機をうかがっていたのである。

独立を前にした父は、本町の某貿易商で女中奉公をしていた同県同郡のマツと見合い結婚。叔父などの支援を仰ぎ念願の酒、醤油などの小売店を当初の地に開業したのであった。時に大正十二年五月。

得意先の獲得のため山口県人会や在郷軍人会などの伝手を求めて東奔西走。地の利（市内電車通り）もあって順調に繁盛しつづであった。

大正十四年。長男誕生に続いて、長女（二歳で死去）、二男（私）、三男の子宝に恵まれ「中道商店」は我が世の春を謳歌していた。

昭和七年、ここ釜山を「墳墓の地」にしようとして決断した父は、本籍地に取って返す。中道家の墓に眠る代々の骨を捧持し、甘川里を見下す釜山共同墓地の一角に新たに「中道家之墓」を建立し納骨。供養するとともに先祖への報告を終えた父の満足感はいかばかりであ

つたらうか。

#### 思わぬ誤算

当時の商売は、通い帳による売掛方式が主で、月末精算が習わしであった。ところが、集金に行くとき既に転居していて所在不明、都合がつかず支払い延期を申し出るなど、売掛金の回収も意のままならず、それが重複してついに倒産。同町内二丁目の長屋へ転居後、父は忠清北道清安駅近くの釜山へ、友人を頼って単身赴任のやむなきに至った。時に私の小学校入学を一年後に控えた昭和十年春のことであった。加えてこの年、二女の出産もあって、育ち盛りの男子三人と乳飲み子を抱えた家計のやりくりにも頭を痛めていた。

妹を背負って売掛金の回収にあたる母に同行したことも度々であったが、依然として実績は上がらなかった。

釜山での収入もさして思わしくなかったのか、わずか二年余で退職した父は、直ちに消防組の筒先き（火消し役）に転職。「筒先き」という仕事は、夜勤明けの休みがある。この休みを活用し、副収入を得ること

も考えたようである。生来頑健な体格と天賦の社交性を併せもつ父なればこそと思われるが、借金返済の一日も早からんことを願う家長の心意気が、私には今にして改めて実感として理解できるところである。

その消防組も、昭和十五年晴れて消防署に昇格。「今日から俺は官吏になったんだぞ」と祝杯を上げていた父の得意な笑顔が蘇ってくる。

しのび寄る戦争への足音

昭和十二年四月、文部省編「国体の本義」が刊行されて以来、出版物等の事前検閲、統制強化が進められ、国民の生活は軍事一色に塗りつぶされていった。

同年七月七日「日支事変」勃発。これを契機に教育に対する戦争の影響も逐次強まり、教育行政の上にも戦時下教育という考え方が強く示されるようになった。

「みたみわれ 正しく剛くより清く 修めてわれを国に捧げん」これは私の入学した釜山第六公立尋常小学校の教育精神を歌ったものであるが、朝礼時の伊勢神宮並びに宮城遙拝に始まる校長訓示に、小国民ながらも身の引き締まる思いがしたものである。

南京陥落の戦勝祝賀提灯行列の華やかなムードに酔いしれているころであった。近所の同級生K君の兄の壮烈な戦死の報がもたらされた。K小隊長は、部下の兵士数名を従え、城門解放のためか城壁に架けた梯子を率先してよじ登っていく最中に狙撃され、ついに帰らぬ人となったとのことであった。

白布に包まれた英霊の無言の帰還を、軍国の母として気丈にも涙も見せずに毅然たる態度で迎えておられた母親。やや大きめの学生帽を目深にかぶり、編上靴を履いたK君の小さな歩幅姿が、なぜか今も暇に焼きついて離れない。手に手に日の丸の小旗を打ちふり、天へ突き抜けよとばかり、「出征兵士を送る歌」を歌いながら、戦地へ向かう兵隊を釜山駅に送ったあの熱狂も、戦線拡大に比例して幾度か。

南浜の広大な埋立地は軍用トラック、軍馬などが大陸輸送の便を待つ間の待機所と化し、おびただしい軍隊の仮泊所として学校や神社はもとより、町内の一般住宅が充てられるなど、非常時化の軍事優先態勢が着々と侵攻していった。

長屋住宅のわが家にも、兵二名の宿泊割当てが数回あったが、明日の身もしれない兵隊さんとあって、母も可能な限りのもてなしをしたようであった。

部屋に掲げられていた善行証書や感謝状を見て、兵士たちは「お宅のお父さんを敬服します」と語っていたが、今もあの独特の軍靴や背のうの臭気が私の記憶の核にしみついている。あの天真らんまんの若き兵士たちは、その大部分が多分悲惨な運命をたどったであろうと察すると、胸の痛みを覚えるものである。

昭和十五年三月、釜山公立高等小学校を卒業した兄は、直ちに釜山鉄道工場の技工見習養成所三回生として社会人への一歩を印した。

扶養家族が一人減ったとはいえ、依然として家計は好転しなかった。前年に気管支カタルを患った私は、長期間にわたり自宅療養を余儀なくされたが、その医療費が重荷となっていたことは想像に難くない。

#### 皇国民の錬成

昭和十六年四月一日、「国民学校令」の施行に伴い、七十年間にわたり全国民に親しまれてきた尋常小学校

が国民学校に改められた。

ちょうど六年生となった私たちは、文字通り国民学校初等科一期生となったのである。六年生進級の最大の楽しみは、内地への修学旅行であった。外地生まれの二世に、日本人としての誇りと自覚をとのことで、関釜連絡船を利用しての太宰府天満宮参拝がお決まりのコースであった。

しかし、非常時下とのことで何の因果か私たちからこれが中止となったのであった。

「内地がだめなら、せめて鮮内でも……」と懇願したが所詮無駄であった。日米交渉も依然として好転せず、世はまさに非常時下のことでやむを得ない措置であった（？）にせよ、極めて残念なことであった。

かつて私の勤務した小学校の百年誌をひもといてみると、内地では昭和十八年度から「修学旅行全面廃止」とあったが故に、なお一層その感を深くするものである。

また、校長先生に修身の授業を緊張のうちに受けたこと、教育勅語はもとより青少年学徒に「賜ワリタル

「勅語」の全文暗唱、秋季大運動会が大体練習会と改称され、戦時色豊かな競技種目が展開されたことなど、皇国民の錬成道場として国民学校は様変わりを呈してきたのであった。

欲しがりません勝つまでは

朝日新聞の年表によると、昭和十五年五月、米・砂糖・マッチの配給制が、七月には贅沢品禁止令、十一月には隣組制度が施行されたが、朝鮮では米の配給制度は内地より遅れて実施された。一日二合五勺の配給量では到底満腹感は得られなかった。

「配給量はばくだって兄と同じなのに飯が少ない」と愚痴をこぼす弟。兄弟が卑しくなるのは何もわが家だけではなかったはずである。

生活必需品の欠乏も日を増すごとに顕著になってきたが、特に運動靴の配給を待ちこがれた。担任教師による現有の靴の点検を受け、破損度の高い順に配給切符を手にしたが、注文通りのサイズがない場合もあつて、靴に足を合わせるといった苦勞も味わつた。

まさに「欲しがりません勝つまでは」の精神の表れ

といえよう。

大東亜戦争へ突入

忘れもしない十二月八日「臨時ニュースを申し上げます」のラジオ放送に始まった日米開戦。軍艦マーチに続く時の大本営発表は、日本海軍のハワイ真珠湾奇襲攻撃の成果を誇らしげに伝え、国民の戦意を一層煽り立てた。

受験勉強真つ最中の我らは、戦勝気分に入り、「撃ちてしまん」の気概に燃え勉強も手につかなかった。しかし、忠誠勇武なわが皇軍の快進撃に酔いしれてはいられなかった。受験組の特訓は相変わらずで、共通テストの連続、夕方遅くなるまでの居残り授業などに取り組まざるを得なかった。当時、六年担任の力量が入試合格率で評価されていたとあつて、四組の各担任の入れこみ方は尋常ではなかった。

口頭試問に備えて「日独伊三国同盟の意義」「五・三とは」などおよそ学力判定に直接関係のないことにも取り組まされたが、お陰で暗記力はかなり鍛えられた。

昭和十七年二月、わが人生初の試験である入学試験を無事突破、希望の釜山一商に合格。三月には国民学校初等科修了生として母校を巣立つことができた。

初めての長ズボン、さめ皮の編上靴、何度も巻き直したゲートル、さらには校章入りの戦闘帽着用、中等学校生徒としての自覚も新たに、期待感を抱いて一商の門をくぐったのであったが……。

配属将校による軍事教練、気合のこもった銃剣術訓練や五年生を指揮者とする全校生の分列行進など、戦時下の学校はまさに軍事色一辺倒であった。「気合が入ってない」「連帯責任だ」の叱責で、同級生同士が対列しての往復ビンタなど日常茶飯事であった。

その痛さもさることながら、発育盛りの我らを悩ましたのは空腹感との戦いであった。

二合五勺が二合三勺に減配となったこともあって、いざ弁当箱を開けてみると隅の方にすき間ができていくことなど珍しくなかった。銀飯とは言わないが、せめて麦飯でも腹いっぱい食ってみたいと何度思ったことか。

このような社会の変化、学校生活の変化の中で、大東亜戦争の転機がやってこようとは……。

#### 戦の道に二つなし

昭和十七年六月、ミッドウェイ海戦を手始めに米軍の猛反攻が開始され、各戦線で撤退や玉砕が行われるなど、戦況は日本にとって次第に不利に傾いていった。半年前までの大戦果に新聞を見、ニュースを聞いては戦地を幻想し、占領と撃沈をわが事のように歓声をあげたあの興奮を今一度と期待したが、所詮無駄であった。

昭和十八年十月、三女の末っ子誕生。家計は相変わらず火の車であった。

同年十二月、第一回学徒出陣の壮行会が神宮外苑で華々しくも悲壮感を秘めて行われたが、もはや学徒はペンを握ってはいられなかった。学業よりは国の大事に殉ずることが先決であった。

釜山埠頭での荷役作業、空襲に備えた防火用貯水池や防空壕掘りなどの動員が相続いたが、いつもながらの空腹感との戦いは耐え難いものであった。わずかな

楽しみはドングリ粉混入の興亜パンの特配を、むさぼるようにして食べた休憩時間であった。

卒業や進学を断念して甲種飛行予科練習生ら、軍関係への志願者が相次いで出てきたのもこのころであった。七つ釘の予科練の制服は当時の若者のあこがれの的であった。しかし、私はなぜか陸軍の方に魅力を感じていたので、この方の少年飛行兵受験を決意した。

昭和十九年初冬のことであった。釜山における一次試験に合格。二次試験のため京城の陸軍部隊へ。幸い兄のお陰で鉄道無料パスを利用、龍山在住の叔父宅に宿泊したので家計には大して負担をかけなかった。

二次試験とあって、飛行兵としての資質を試すためか、回転椅子十回転後の目の動きを測るテストなどもあったが、初日も難なくパス。二日目の口頭試問で受験の動機を問われたが、待つてましたとばかり優等生らしい返答を簡潔に述べ、これで合格間違いなしと内心自信満々で合否発表を待った。

試験官の前に立った私に「貴様は残念ながら蓄膿症の疑いがある。治療してまた来年受験せよ。よって不

合格」「復唱不合格」不動の姿勢で一礼し、すこすこと退席したものの、凍結した漢江のほとりを歩く敗北の少年には、京城の寒さは尋常ではなかった。

#### 工場動員とB29襲来

戦局は日増しに緊迫し、B29の本土空襲、朝鮮海峽への敵潜水艦出現、度重なる南鮮海域への警戒警報発令など、戦場が身近に迫るものを覚えるようになってきた。

授業日数は激減し、軍事教練の強化と勤労働員の名の下に駆り出されることもしばしばであった。

昭和十九年六月、我ら三年生の半数約七十余人について工場動員令が下りた。南富民町海岸端の東洋工作所で「八・八・七型」と称する高射砲の弾丸造りに従事することになったのである。原弾の荒削りから仕上げ検査に至る一貫作業で、確か十三工程と記憶しているが、朝鮮人工員に旋盤操作を教わりながら、私の担当する第五工程の作業に興味をもって没頭。そのためか操作にも比較的早く習熟したが、流れ作業のため前の工程から材料が送られない限り、開店休業の状態が

続く有様であった。

職長や引率教師は、まず、安全第一を心がけ、工場内の整理整頓を強く呼びかけていたが、親友のH君が右手指二本を旋盤にはさまれて切断するという痛ましい事故が発生。動員学徒の同情もさることながら、敵愾心はいやが上にも盛り上がり、生産増強を無言のうち誓ったものであった。

そのころ、釜山の軍需工場一日に製造される高射砲弾は、B 29の襲来を受けた八幡製鉄所防衛のために、わずか一時間で消耗されると聞いていたが、旧式の旋盤に加えて部品の不足もあり、生産目標達成は容易ではなかった。

ある日の午後、工場内のサイレンがけたたましく鳴り、「敵機襲来、全員退避！」の避難命令が、直ちに工場横の空地に設けられた蓋のない名ばかりの防空壕に飛び込み、敵機はいずこにと空を仰いだ。そこには初めて見る飛行機雲をなびかせたB 29一機が、悠然と飛行中であつた。

突然、同機に対し対空砲火の一斉射撃が開始された。

五臓六腑を揺るがすような大音響とともに、炸裂する高射砲撃が容赦なく敵機を襲う。ところが、撃墜をひたすら願う我らを嘲笑するかのようには、爆弾一つ落とすでもなく飛び去つて行つたが、初体験の避難ながら恐怖心よりも先に、敵対意識の方が猛然とわいてきたのであつた。

翌日の釜山日報は「B 29釜山を狙う」の大見出しで初の襲来を報じていたが、これを境にして空襲警報が頻発されるに至つた。

原材料不足で工場動員解除となつた我らを待つていたのは、九徳山からの軍隊納入の薪運びや、旧式村田鏡を担つての野外教練などであつた。損傷著しい学生服や地下足袋の修繕に、慣れない縫針を手にすることもしばしばであつた。「欲しがりません勝つまでは」の戦時標語がうらめしくさえ感じられたのも、敗色濃厚なこの期に及んでは自然の成り行きであつたらうか。

戦況逼迫

昭和二十年三月、釜山鉄道工場に勤務中の兄に、「満州牡丹江鉄道第四連隊二現地入隊スベシ」の召集令状



が届いた。徴兵検査で第一乙種合格の兄は、元来頑健な方ではなかったので、酷寒の満州へ向かうわが子を気遣う母の思いが痛いように感じとられた。

大和男子の晴れの旅の前にした兄は、私と弟・妹の三人をこっそり裏庭に集め、泣きながらも長男の威厳を保ちつつ、「よく聞け。俺は生きて帰れないかもしれない。お前たちは親の言いつけを守り、心配をかけるようなことは決してするな。わかったか」と力強く胸を張って言った。

三人ともただ黙ってうなずくのみであったが、兄弟の絆を今更ながら痛感した次第である。

日の丸の小旗を振りながら釜山駅までの道すがら、「国のためとはいえ、必ず生きて帰って……」と神に祈らずにいられなかった。

昭和三十年四月、前年度からの繰り上げ卒業により最上級生の四年となった我らに、またしても工場動員令が下った。遠い西面地区さいめんにある加藤製作所とあって、早朝から各自が市内電車が通うことになった。

ここは、板金、製缶、鑄造、鍛造などの部門を有す

るかなり大規模な工場で、野砲や山砲の台車ハウジングや、沖繩決戦へ急げとばかり新型手投弾の製造にあたるなど、文字通りの軍需工場であった。

ある朝のことである。例により一番電車が釜山府庁前へ差し掛かったとき、けたたましいサイレンとともに耳をつんざく対空砲火の大音響。電車を飛び降り街路樹の下に身を潜めおそるおそる空を仰いだ。目前の三中井百貨店屋上からは高射機関銃が狂ったように火を吐いている。両翼にアメリカのマークも鮮やかなグラマン機が三機、二百メートル余の超低空で飛び去って行く。

過去に襲来した敵機はB 24、P B 2 Y、B 29の大型機であったが、これは一体どうしたのか？ 航続距離の短い艦載機グラマンとあれば、日本近海に航空母艦がいることになる。

こうなれば戦況逼迫を実感せずにはいられなかった。身近に戦場ありと……。

この空襲から間もないことであった。当時釜山鎮の消防派出所に勤務中の父が、緊急出動中の消防車の急

ハンドル操作により振り落とされ、負傷するという事故に見舞われた。幸い入院に至らずに済んだが、座骨神経痛で長期療養の身となった。

寝返りもままならず、灯下管制下のほの暗い光の下で、懸命に看病する母の苦労も並大抵ではなかった。

光が外部に漏れたと言っては警防団にどなられたことも再三であった。

#### 外地での玉音放送

昭和二十年五月、ドイツ無条件降伏、六月沖繩玉砕発表。七月から主食配給量が従来の一合三勺から二合に減らされた。もはや気力で生き延びるしかなかった。

八月に入つて、釜山地区に連日連夜の空襲警報発令。暗闇に響くサイレンと轟く対空砲火の無気味さに恐怖を覚えながら、サーチライトに捕捉された敵機の爆弾投下なきをひたすら願つたものだった。

八月六日、広島へ原爆投下。釜山日報は一面に四段抜きで「新型爆弾か―相当の被害ある模様」との大見出しで報じた。

八月八日ソ連参戦、九日長崎へ原爆投下と続き今や

戦争終結は時間の問題であった。

八月十四日、いつものように工場出勤。午後三時ごろであつたろうか。「動員学徒に告ぐ。明十五日は全員学校へ集合せよ」の指示が場内放送でなされた。

何事ならんと不安を抱きながら、翌十五日久しぶりの母校に赴く。我らを待っていたのは、真夏の太陽の照りつける炎天下、予備役下士官による銃剣術の特訓であつた。本土決戦が叫ばれていたとあつて、当然の訓練と受け止めてはいたが……。

正午前、全員職員室の窓際に集合。正午から始まつた初めて聞く玉音放送も、妨害電波の影響か雑音が多く、内容を十分理解できぬまま放送終了。教師の説明で敗戦を知つたが、それが無条件降伏とは素直に受けとれなかつた。神州不滅を信じ、学業を捨てて一途に国の大事に殉じてきた我らであつたが故に。

これまで聖戦と信じ、七生報国を誓い合つた我ら学徒であつたが、だれ一人として涙をみせる者はいなかつた。

下校中に見た電車通りには、白い民族衣裳をまとつ

た多数の朝鮮人が「マンセーイ、マンセーイ」と両手を高々とあげて解放の喜びを全身で表わしている。西大新町の十二間道路でも、どこから集まったのか大勢の朝鮮人が、リーダーの街頭演説に耳を傾けている。

行き交う彼らの軽蔑の視線を避けながら帰宅したが、斜め向かいの朝鮮人経営の洗濯屋の子どもに、「やーい、日本戦争に負けたんや」と言われ、切齒扼腕したものであった。

#### 敗戦後の日々

敗戦第一夜を迎えた日本人街は、依然として灯火管制のもと、戸締まりも厳重にして息をひそめていた。

しかし、天馬山麓の密集部落には電灯がきらめいているではないか。

それは、戦争終結、日帝支配からの解放を訴える狼煙のように見えた。

治安不安におののく日本人と対象的に、「韓国独立万歳」「日帝支配終結万歳」などの幟を押し立ててデモ行進する狂喜の一団、突如組織された韓国独立青年隊の得意満面な武装姿、日韓市場の通路にまで所狭しと

ばかり並んだ露店の数々……。世はまさに彼らの天下に帰っていた。

早く内地に引き揚げねばならぬと、その準備に追われる日本人も目立ってきたが、さし迫った身辺への危険も感じなかつたので、わが家は兄の復員を待つことにした。

夏休み中の学校や寺などには、満州や北鮮方面から戦火を逃れてきた邦人で超満員であった。いつ出航するのか当てのない引揚船を待つ間、不自由極まる生活を強いられていたが、これに比べるとまだ私たちは幸せであった。

闇船（借上げ船）を雇って内地へ引き揚げる近隣の日本人が増えるに従い、在留邦人の間にあせりが見えてきた。釜山港口の警備艇の監視強化で、闇船による出国も次第に困難となってきた。

デマと喧騒に明け暮れる中で、対馬の比田勝と博多間の連絡船であった珠丸が、触雷沈没し多数の死者が出たとの情報が流れ、引揚げへの不安感は募るばかりであった。

さらば釜山よ

生死不明の兄の復員も期待できず、ついに内地引揚げの日を迎えるに至った。時は昭和二十年十一月二十日ごろ。手作りの特大リュックサックに詰め込んだ生活必需品の重量感に耐えながら、よろめくように釜山棧橋へ。

わが家の財産は、両親と私と弟の背負う四つのリュックサックのみ。妹は二歳に満たない末っ子の守役に終始したが、父の体調は今一歩で、母も何かと氣遣っていた。

棧橋には、引揚船白山丸を待つ邦人の長蛇の列が続いていた。乗船を前にして米軍による頭と下腹部へのDDT撒布を受けたが、それは人間扱いに程遠いもので、敗戦国民の悲哀と無念さを思い知らされたのであった。

ようやく夕闇が迫るころ、満載の白山丸は汽笛を鳴らしつつ棧橋を離れていった。

「わが生地よさらば！もう再び訪ねることのない揺籃の地よいざさらば！」絶叫したい気持ちを押しさへな

がら、遠ざかる天馬山、釜山大橋、牧の島、五六島に無言の別れを告げていた。頬に伝わる二筋の涙を拭おうともせずに……。

懸念された触雷事故もなく、無事博多港に入港。苦勞して乗り込んだ引揚げ列車の沿線には、爆撃の被害も生々しい惨状が延々と続いていた。釜山では見ることもなかった戦争の傷跡に、今さらながら大戦の残酷さ、空しさを思い知らされたのであった。

#### 招かれざる客

柳井駅で仮泊した一家は、馬車に揺れながら、三里先の母の実家へ向かった。故郷を捨てた父の帰着先は、不本意ながらも妻に委ねる外はなかったのである。

佐賀村にたどり着いたのは午後二時過ぎ。

ところが、そこには一足先に母の兄一家七人が既に引き揚げており、両親の困惑さは一人であった。実家の長男の伯父は、家業の百姓を二男の叔父に譲り、これもまた朝鮮に骨を埋める覚悟であったので、三家族十九人が一つ屋根のもとに暮らす羽目となったのであった。

数日して親族会議がもたれ、実家の跡取り問題が協議されたが、発言権のない父は終始無言のまま、別室で控えているのみであった。

こうなれば、いつまでもここに居候することは許されなかった。部落会長の世話で会館に付属する十畳余の一室を借用することになったが、急造の住居であつて畳代わりに藁を敷いて我慢するという有様であつた。私は向学心に燃えていた。直ちに転入手続を行つたが、即時転入学とはいかなかつた。

柳井商工学校から転入許可通知を受け、登校したのは翌年一月十六日のことであつた。

片道約二時間かけて徒歩通学することになったが、三月卒業までのわずか二カ月間とあつて頑張り通した。戦時中の動員に伴う学力低下を憂慮したが、予想に反し内地の方が遥かに遅れていたもので、幸運にも好成績を修めて卒業するに至つた。

耐乏生活が依然として続く中で、農作物が荒らされたり、洗濯物が紛失するなどの不祥事も多発した。その都度「あれは朝鮮戻りの仕業だ」との差別偏見のう

わさが飛び交い、あらぬ嫌疑をかけられたことも再三再四。

「渴しても盗泉の水は飲まず。今に見ておれ俺たちを！」猛然たる反骨精神が朝鮮戻りの一家を奮い立たせたのであつた。

狭いながらも楽しい我が家

生計維持のため、父は鮮魚の行商を始めたが、「昔とつた杵柄」商才をフルに發揮し、生活安定の兆もわずかながら見えてきた。

学業を断念した弟は自動車修理見習い、私は隣町の潜水学校跡地に進駐していたニュージールランド軍キャンプの常備勤務に従事。少しは落ち着きを取り戻したわが家であつたが、一日も欠かさず陰膳を供えて、兄の無事を祈る母の姿が痛わしかった。

忘れもしない二十二年七月、夏祭りを前にしたある日の朝刊山口版の片隅に、シベリア帰還の本県関係者の中から「中道宏」の名前を見つけた私の驚きと喜びの交錯した叫び声。

家族なканずく母の喜びようといったら……。二年

半ぶりに一家七人そろったわが家は、狭いながらも家庭だんらんの味を再び味わうことになった。しかし、依然として食糧難は解消しなかった。十六キロばかり離れた本籍地の屋敷跡まで、日曜日を利用して自転車で出かけては豆類、いも類、小麦などの農作物づくりに励んだものであった。

#### 予期せぬ転身

明けて二十三年二月、柳井の某名士の口利きで、兄は柳井機関区へ機関助手見習いとして就職し、寮生活に入ってしまった。一方私は、六三制の新学生施行による全国的な教員不足から、妹の通う小学校長より代用教員への誘いを受けた。「昭和の二宮金次郎」の異名を奉られた謹言実直なI校長さんは、親切にも文部省刊行の「新教育の指針」を参考にと持参されたので、無下に断ることもできず、「デモ・シカ先生」の一員として新たな人生を歩むことになった。時に昭和二十三年四月一日。

後年、同一町内に勤務する仲間の某小学校長が、くしくもかつてのI校長の長男さんということが分か

ったが、人の世の摩可不思議な因縁さらには歲月の流れを今さらながら実感したものであった。

幸いにも、二十四年九月山口大学に特設された小学校教員臨時養成科入試に合格。一年間の現職教育を経て無事教員免許を取得し晴れて教諭に昇格。一人前の教師と目標に新教育推進に全力投球してきたが、縁あって二十九年四月に結婚、ようやく家庭基盤も安定するに至った。

校長職を最後に、四十二年にわたる教職生活にピリオドを打ったのは、平成二年三月末のことであった。

#### おわりに

定年退職を前にした最後の夏休み、二度と訪れることもできないと覚悟したわが生地釜山を、引揚げ以来実に四十四年ぶりに訪ねた私の胸中を去来したものは……。

感無量、筆舌に尽くし難い感動。生きている幸せと平和の有り難さをしみじみ味わいながら、いつしか「誰か故郷を想わざる」のメロディーを口ずさんでいたのであった。

四十九回目の終戦記念日に、首相は式典で「不戦の決意のもと、自らの歴史を反省し、戦争の悲惨さとそこに幾多の犠牲があったことを、若い世代に語り継がなければならぬ」と述べた。

全く然り、過去の愚を再び繰り返してはならない。私は声を大にして訴えたい。

「戦争は人類最大の悪。永遠の平和を願って……」と。

### 【執筆者の横顔】

檜垣正人氏の父は山口県で農業をしていたが十八歳で両親を失ったのをきっかけに叔父を頼って単身渡鮮し商売の手ほどきをうけながら叔父の手助けをしていた。やがて徴兵に合格して入営。好成績で除隊し再び商売に従事。結婚したのは大正十三年に念願の酒、醤油などの小売店を開業し地の利もあって順調に繁盛し、大正十四年に長男に続いて長女、二男正人氏と誕生しわが世の春を謳歌していた。当時は売掛方式が主たる商売だったので毎月の月末精算に売掛金の回収が

できない。積もり積もってついに倒産し裏長屋に転居の止むなきに至り父は鉱山人夫となった。母はこの年に次女を出産、育ち盛りの三人と乳飲み子をかかえた母は苦悩の連続である。父は二年余りで鉱山を退職し消防に入り、昭和十五年消防署と改められたので父は公吏になったと喜んでいた。

昭和十五年長兄は公立尋常高等科を卒業し釜山鉄道工場の技工養成所を終え社会人の第一歩を印した。十二月八日の日米開戦に緊張する。正人氏は釜山一商の二年だったが学徒出陣の壮行会に出席し学生はペンを握ってはおれない。国の大事に殉ずるのが先決だった。学徒は埠頭で荷役作業、防火用水池や防空壕掘りの連続で空腹との戦いに耐え難いものがあった。

昭和二十年三月釜山鉄道工場勤務の兄に召集令状が届いた。みれば満州牡丹江鉄道隊に入隊せよ、兄はこっそり裏庭に正人氏と弟妹の三人に、泣きながら生きて帰れないらしい。お前たち、親の言いつけを守り親に心配かけるな、と胸を張って言った。正人氏は兄弟の絆を痛感した。二十年八月十五日玉音放送を拝聴し

正人氏は少年ながら切齒扼腕した。

博多に引き揚げたのは昭和二十年十一月二十日、故郷を捨てた父は山口県には行かず母の生家佐賀を訪ねて落ち着いた。父は雑魚の行商、弟は自動車修理見習い、正人氏はニュージールランド軍のキャンプに常備勤務、二十二年七月兄が復員、二年半ぶりで一家七人がそろった。明けて二十二年二月兄の宏氏は柳井機関区の機関助手に採用され、正人氏は同年四月山口大学臨時教員養成所を卒業して教諭、校長の栄職を担う。正人氏は親孝行を實踐、兄弟姉妹の情愛のゆたかさ特に兄おもいの強靱な心根の深さに敬意を表する。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

語り継ぎ伝えたい願いと  
遺しておきたい祈り

山口県 宮田 榮 一

—苦節四年有半のシベリア強制抑留の姿—

私は朝鮮京畿道仁川府で出生した。三歳のときに両親を亡くし、祖父母と三人で生活することになった。幼いころに両親を亡くしたので兄の姿も覚えていない。温かみのあるそして、ぬくもりのある父母との暮らしを持たないままに育ってきたことを思い出すととてもつらい気持ちでいっぱいであった。

両親に成り代わって祖父母はよく私の面倒をみてくれていたことを今でも思い出す。

小学校へ入学するときも、他の子供は母親と手をつないで校門に入っていくのに、私だけは祖母に手を引かれて校門をくぐって行った。

当時、祖父母は薬局を営んではいたが、経営が思わ